

## 未来における新しい人間像

——ツァラトゥストラのメッセージ——

湯 田 豊

### (1) 『ツァラトゥストラはこのように語った』における作者のメッセージ

一九世紀のドイツの哲学者、フリードリヒ・ニーチェ [Friedrich Nietzsche] は、わたくしにとって非常に魅力的な哲学者であります。ニーチェの哲学の研究は、わたくしにとってライフ・ワークの一つであると言えます。彼は一八四四年十月十五日にプロイセンのレッケンに生まれ、一八八九年一月三日にイタリアのトリノで精神的に崩壊し、一九〇〇年八月五日に死ぬまで狂気のままでした。ニーチェについて、わたくしは一九九八年に一冊の小冊子を出版しました。『ニーチェ——真理の迷路』〔丸善ライブラリー〕がそれです。『ニーチェ——真理の迷路』を出版してから、わたくしは西暦二〇〇〇年の二月に『ウパニシャッド——翻訳および解説——』〔大東出版社〕

を刊行しました。ウパニシャッド〔Upanisad〕というのは、古代インドの最も古く、そして最も重要なバラモンの哲学的ウパニシャッド小冊子であり、ヒンドゥー教の聖典であります。ウパニシャッドは古代インドの言語、サンスクリットで書かれています。サンスクリットは、一般にSanskritと標記されます。『ウパニシャッド』を翻訳し終え、わたくしは『ブッダの面影——ニーチェは、このように語った——』を執筆しています。ブッダの説法はパーリ語〔Pali〕で記録され、パーリ語は主としてテーラヴァーダ仏教の言語として知られています。『ブッダの面影』において、わたくしはパーリ語のテクストを読み、ブッダの思想をニーチェの思想と比較しています。

さて、『ブッダの面影』を書き終えたあとでわたくしが研究し、そしてその研究の一端を出版という形で世に問いたいと思っているのは、ニーチェの最高傑作〔magnum opus〕である『ツァラトゥストラは、このように語った』〔以下、『ツァラトゥストラ』と略記〕は、世界中において広く読まれています。もちろん、我国においても多くの人によって彼のこの作品は読まれています。しかし、この作品の読者にとって『ツァラトゥストラ』は難解です。日本語の翻訳でなく、ドイツ語の原文で『ツァラトゥストラ』を読む人でさえ、果たしてこの作品のライトモチーフを正しく理解しているのでしょうか？ 『ツァラトゥストラ』の翻訳は多数存在します。しかし、我国においては、残念ながら、『ツァラトゥストラ』についての詳細な研究は存在しません。わたくしは、『ツァラトゥストラ』を読むという作業を間もなく始めようとしています。

しかしながら、『ツァラトゥストラ』を読むという行為は至難の業わざなのです。『ツァラトゥストラ』を読むためには、われわれは幾つかのハードルを越えねばなりません。この作品を正しく読むことは、それほど易やすしくないの

す。『ツァラトゥストラ』に登場するヒーローはツァラトゥストラ (Zarathustra) ですが、ツァラトゥストラとは誰なのか、なぜ、ツァラトゥストラがニーチェのスポークスマンにならねばならなかったのかという問いに、われわれは答えなければなりません。ツァラトゥストラは、アヴェスタ語のザラスシュトラに対応するドイツ語であり、ニーチェのツァラトゥストラは、アヴェスタのザラスシュトラという背景を考慮しながら、理解されるべきです。そして、ツァラトゥストラは英語のゾロアスターに対応する言葉です。しかし、英語のゾロアスターという発音はアヴェスタではなく、ギリシャ語に由来します。いずれにせよ、わたくしはアヴェスタのザラスシュトラとの対比においてニーチェのツァラトゥストラを考察しなければなりません。

さて、ニーチェの『ツァラトゥストラ』とは、一体、どういう作品なのでしょう。もしも、彼の作品を三つの時期に分けるとすれば、最初の時期は一八六九―一八七六年、第二の時期は一八七六―一八八二年、第三の時期は一八八三―一八八八年というふうになります。『ツァラトゥストラ』は一八八三―一八八五年に書かれました。それゆえに、『ツァラトゥストラ』は第三期の作品であります。この作品は、彼の晩年の作品です。わたくし自身は、『ツァラトゥストラ』を『善悪のかなたに』(Jenseits von Gut und Böse, 1886) および『道徳の系譜に向かって』(Zur Genealogie der Moral, 1887) と一まとめにして考察したいと思えます。ところで、ツァラトゥストラのメッセージ、あるいは教えとは何でしょうか。この問いに、わたくしは答えねばなりません。神は死んだ”と言って神の死を宣言したニーチェにとって、あとに残されているのは人間だけでした。『ツァラトゥストラ』におけるツァラトゥストラ／ニーチェのメッセージは“新しい人間”のイメージを作ることなのです。『ツァラトゥストラ』は未来の哲学であり、彼の哲学において最も重要なものは“新しい人間”のイメージであり、ツァラトゥストラ／

ニーチェは、「新しい人間の預言者」として理解されるべきです。未来の新しい人間のイメージ、新しい人間像を作ることに——それが『ツァラトゥストラ』という彼の作品の真のテーマなのです。

『ツァラトゥストラ』における告知あるいはメッセージは、今まで人類に欠けていた目標を与えることに他なりません。しかし、ヨーロッパの伝統の中心にあるのはギリシア哲学、特にプラトン哲学、キリスト教、およびそれらの伝統の上に築かれているヨーロッパの文化であります。プラトン哲学、キリスト教、あるいはそれらに基づいているヨーロッパの文化を、ツァラトゥストラ／ニーチェは激しく攻撃します。古代ペルシアのツァラトゥストラあるいは預言者として、ニーチェはヨーロッパ文明を、いわば非ヨーロッパ的なパースペクティブから眺めているように思われます。彼のパースペクティブ、あるいはパースペクティブエ [Perspektive] は重要です。パースペクティブは視点、観点、あるいは視野というほどの意味です。彼はプラトン／キリスト教のパースペクティブを批判し、「魂」よりもむしろ「肉体」と「大地」、「あの世」よりもむしろ「この世」、「真実の世界」よりもむしろ「見せかけの世界」を高く評価します。ツァラトゥストラ／ニーチェにとって「見せかけの世界」は、実は、見せかけの世界ではなく、真実の世界なのです。ニーチェの「真実の世界」は「存在」であるよりも、むしろ「生成」であり、遠からず消滅するカオスなのです。

ツァラトゥストラ／ニーチェのメッセージは、(1) 超人 [Übermensch]、(2) カへの意思 [Der Wille zur Macht]、(3) 永遠の回帰 [die ewige Wiederkehr] であり、これらのメッセージによって神の死後に人間は新しくなることを約束されます。未来の新しい人間は「カへの意思」を有し、永遠に回帰する超人でなければなりません。『ツァラトゥストラ』における彼のメッセージを、わたくしは哲学理論としてではなく、一つの文学作品

における虚構としてスケッチしようと思います。

## (2) ドラマとしての『ツァラトゥストラ』

さて、『ツァラトゥストラ』を哲学書として扱うか、あるいは文学作品ないし詩 (*Dichtung*) として解釈するか——それが問題なのです。わたくし自身は、『ツァラトゥストラ』を文学作品、ないし詩として扱うという選択をしました。もちろん、『ツァラトゥストラ』に哲学が欠けているというのではありません。それは、古い哲学書ではなく、新しい、詩によって創作された哲学書としても読まれるべきなのです。『ツァラトゥストラ』は、一種のドラマの形態を備え、物語の構造を有しております。この作品の主人公のツァラトゥストラの主要なテーマは、超人、力への意志、および永遠の回帰であり、この作品の物語はこれらのテーマをめぐって展開されます。『ツァラトゥストラ』はドラマティックな物語としてニーチェによって書かれた唯一の作品です。ニーチェは、私見によれば、プラトン、カント、あるいはヘーゲルなどと肩を並べる大哲学者であります。同時に彼は第一級の詩人でもあります。わたくしはニーチェを詩人として位置づけ、彼によって創作されたツァラトゥストラが、どのようにして、孤独に耐え、病気に苦しめられながら、苦しみを通じて人間として大きくなり、自己自身を克服するかを『ツァラトゥストラ』においてスケッチし、この作品を通して二一世紀におけるわれわれ自身の生き方を模索し、われわれ自身の時代精神に照らしてツァラトゥストラのメッセージを検討し、このようにして、われわれ自身の問題を根底から問い直したいと思えます。『未来における新しい人間像——ツァラトゥストラのメッセージ——』をわたくし

しが執筆する際には、「ニーチェのツァラトゥストラは誰か？」という問いに真剣に答えなければなりません。この問いに対するわたくしの答えは、二〇世紀のドイツの哲学者ハイデガー [Heidegger, 1889-1976] のそれとは異なります。しかし、ハイデガーのエッセイ、「ニーチェのツァラトゥストラは誰か？」に、「わたくしは触れないわけにはいかないでしょう……」

さて、『ツァラトゥストラ』は四部作です。この作品の第一部は一八八三年の夏に出版されました。それは「ツァラトゥストラのプロローグ」、「ツァラトゥストラのスピーチ」、および22のセクションから構成されています。第二部は一八八三年の冬に出版され、22のセクションから成り立っています。第三部は一八八四年に出版され、16のセクションを含んでいます。そして、一八八五年に『ツァラトゥストラ』の第四部は私家版として四十冊だけニーチェによって自費出版され、それらのうち七冊だけが友人たちにプレゼントされました。

わたくしは『ツァラトゥストラ』を現代の悲劇として理解します。それは、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』と同じように、一つの教養小説 [Bildungsroman] として理解されます。しかし、『ツァラトゥストラ』の構成に関して、一つの重大な問題があります。一般的には、『ツァラトゥストラ』は第一部から始まって第三部に於いて完結する、と考えられています。この考えに従えば、『ツァラトゥストラ』のクライマックスは「第三部」に見い出され、「第四部」は余計な付録であり、第一―三部に対して、それは本質的な事柄を何ひとつ付け加えないのです。『ツァラトゥストラ』は「第三部」を以て終わるべきであったという考えが、ニーチェ研究において有力です。しかし、私見によれば、「第四部」にはニーチェ／ツァラトゥストラの英雄的自己投影の悲劇的性質が見い出されます。「第四部」は『ツァラトゥストラ』にとって不可欠である——このように、わたくしは考えます。

「ツアラトウストラ」という彼の四部作は、永遠の回帰というような、彼の本質的な思想に直参する機会を与える、唯一の書物に他ならない、というふうな、わたくしは思います。わたくしは彼の四部作のプロットに基づいて「ツアラトウストラ」の中心思想を理解するように努力したいと思います。今ここで、わたくしは「ツアラトウストラ」のプロットについてスケッチしようとは思いません。「未来における新しい人間像」において、わたくしはツアラトウストラのプロットを立体的に読者に示すつもりです。ここでは、「ツアラトウストラ」の目次を、わたくしは示すだけにとどめましょう——

ツアラトウストラは、このように語った

万人のための、そして誰のためでもない書物

〔第一部〕

ツアラトウストラのプロローグ

ツアラトウストラのスピーチ

1. 三つの変身について
2. 徳の講座について

3. 背後世界を夢想する人々について
4. 肉体を軽蔑する人々について
5. 喜ぶこと、および苦しむことについて
6. 青白い犯罪者について
7. 読むこと、および書くことについて
8. 山腹の樹木について
9. 死の説教者たちについて
10. 戦争と戦士について
11. 新しい偶像について
12. 市場の蠅はえについて
13. 純潔について
14. 友について
15. 千と一つの目標について
16. 隣人愛について
17. 創造しつ々あるものの道について
18. 小さな老女と若い女
19. 蝮まむしの咬かみ傷

20. 子供と結婚について
21. 自由な死について
22. 賜り物をする徳

第二部

1. 鏡を有する子供
2. 至福の島々で
3. 同情している人々について
4. 聖職者について
5. 徳の高い人々について
6. 賤民について
7. タランチュラについて
8. 有名な賢者たちについて
9. 夜の歌
10. ダンスの歌
11. 墓の歌

12. 自己克服について
13. 崇高な人々について
14. 教養の国
15. 汚れのない認識について
16. 学者について
17. 詩人について
18. 大いなる出来事について
19. 預言者
20. 救済について
21. 人間の思慮深さについて
22. 最も静かな時刻

### 第三部

1. 漂泊する人
2. 幻影と謎について
3. 意に反する至福

4. 日の出より前に
5. 小さくする徳について
6. オリーブ山で
7. 通り過ぎることについて
8. 背教者たちについて
9. 帰郷
10. 三つの悪について
11. 重さの精神について
12. 古い石板と新しい石板について
13. 回復しつつあるもの
14. 大いなる憧れあこがについて
15. もう一つのダンスの歌
16. 七つの封印〔あるいは肯定とアーメンの歌〕

第四部〔最終部〕

1. 蜜の供え物

2. 危急の叫び
3. 王たちとの対話
4. 蛭ひら
5. 魔術師
6. 退職している
7. 最も醜悪な人間
8. みずから進んで乞食になった人
9. 影
10. 正午
11. 挨拶
12. 最後の晚餐ばんさん
13. より高貴な人間について
14. 憂鬱ゆううつの歌
15. 学問について
16. 沙漠の娘たちの間で
17. 目覚め
18. 驢馬ろば祭り

19. 夜にさまよう人の歌

20. しるし

## (3) 『ツァラトウストラ』へのアプローチ

わたくしは、『ツァラトウストラ』をカントあるいはヘーゲル流の哲学書として理解しようとは思いません。ニーチェの『ツァラトウストラ』には哲学的体系も存在しませんし、抽象的な論理も見い出されません。『ツァラトウストラ』は文学作品ないし詩として理解されるべきだ、と、わたくしは思います。『ツァラトウストラ』は、一種の『文学的な現象』と見なされてよいのではないのでしょうか？ この作品を、一詩人による物語として、わたくしは解釈します。ニーチェのスポークスマンとしてのツァラトウストラは、この物語において神の死、大地の意味、あるいは永遠の回帰について語っています。しかし、ツァラトウストラのスピーチは文学作品ないし詩の形を取っていますが、結局、ツァラトウストラによって語られているのは哲学的な討論なのです。このことは、『ツァラトウストラ』を読む人には明白だと、わたくしは思います。まあ、『ツァラトウストラ』は高度に詩的な『哲学小説』である、と言えるのではないのでしょうか？ 『ツァラトウストラ』は詩なのか、それとも哲学なのかと問われれば、それは詩である、と、わたくしは答えざるを得ません。しかし、ニーチェの『ツァラトウストラ』は詩として創作された哲学であります。『ツァラトウストラ』のテーマは新しい未来の哲学思想、すなわち、永遠の回帰の告知であります。けれども、ニーチェ／ツァラトウストラは論拠を示して論証しようとはしません。彼は抽象的な論理に

訴えません。そういう意味では、『ツァラトゥストラ』は哲学書ではありません。ツァラトゥストラのスピーチの形態は論証的というよりも、むしろ教訓的 (didaktisch) であり、彼は彼自身のスピーチによって人々を説得しようとしています。『ツァラトゥストラ』には多くの対話、自己反省、叙情詩風の章句、および歌 (Lied) があります。ニーチェ／ツァラトゥストラは人々を教育しようと企てたのです。ツァラトゥストラは単なる詩人ではなく、偉大な教育者と見なされるべきかも知れません。神の死後に人間は何ものにも頼ることなく、この大地において自立して行かねばなりません。そのために必要なのは、神を全く必要としない “新しい教師” なのです。この新しい教師は、神の死を当然のこととして受け入れ、人は大地に忠実であるべきだという新しい教えを、人間の間にもたらしめます。そして人間が変身すべきだということを、彼に要求します。大地に忠実に人は生きるべきだという教えをもたらずのは “超人” であり、超人は “力への意思” を所有し、永遠に回帰することを欲するのです。ツァラトゥストラの新しい教えは、ニーチェ一流の詩的創作によって人々に告げられます。そして彼のこの詩的創作は哲学的な沈思であるとも言えます。哲学的な沈思として、それはヨーロッパ文化の歴史に対する批判的なコメントリーであると、あるニーチェ研究家は言っています。そして、その人は次のようにも言っています——「政治的なテキストとして、それは革命への、古い秩序の転覆への、そして、そのように新しい秩序のための用意への誘因である」

[Stanley Rosen, *The Mask of Enlightenment Nietzsche's Zarathustra*, Cambridge University Press, 1995, p. 21] と。ニーチェは革新的な思想家ですが、決して単なる学者ではありません。彼は詩人あるいは芸術家として評価されるべきでありましょう。

ただ、『ツァラトゥストラ』にアプローチする際に、わたくしは第一部から始まって第四部に終わる多くの項目

について詳しく論ずることは出来ません。四〇〇字詰原稿用紙で三〇〇枚程度に収めようとすれば、わたくしは各項目についてほんの僅かしかコメントすることしか出来ません。わたくしにとって、一つの方法は『ツァラトゥストラ』の全項目についてコメントするという方法です。その場合には、わたくしは『ツァラトゥストラ』の中から特に重要な項目を選び出し、それらの項目についてある程度詳しくコメントすることです。わたくしは、二つの方法の中間を選ぶことにしました。ブッダのように、わたくしは「中道」を選びました。『ツァラトゥストラ』の中の重要な項目については、ある程度、詳しくコメントし、それ以外の項目についてはミニ・コメントリで済ませよう、と、わたくしは思います。どの項目が重要かは、ニーチェ研究者によって異なりますが、それでも、重要な項目として多くの研究者によって重視されているものも存在します。結局、わたくしは、わたくし自身のパースペクティヴにおいて『ツァラトゥストラ』のテキストについて注釈しなければなりません。

『ツァラトゥストラ』に対する注釈書を出版する際に最も重要なことは何でしょうか。それは、この書物に、どのようにアプローチするかということです。研究においては決定的なのは研究の方法であります。執筆においても、どのようにテーマと取り組むかということが大切です。『ツァラトゥストラ』へ、どのようにアプローチするか？この問いに答えるために、われわれはこの作品の特徴を把握しなければなりません。この作品の特徴について、わたくしはすでに幾度もこの研究ノートにおいて言及しました。それは哲学というよりもむしろ詩的創作であること、そして、ローゼン流に言えば、この作品が「ヨーロッパ文化の歴史に対する批判的なコメントリである」ことを、わたくしは強調しなければなりません。

しかし、ニーチェはツァラトゥストラの口を借りてヨーロッパ文化の歴史を批判しているだけではありません。彼は、西洋の社会的・宗教的、道徳的、そして知的な基盤そのものに挑戦しているのです。ニーチェ／ツァラトゥストラは、否定と肯定という二重の戦略に訴えます。一方において、ツァラトゥストラ／ニーチェは、ヨーロッパの二つの倫理的な柱であるキリスト教とプラトンの遺産を転覆させます。他方において、彼は、それらの古い伝統を批判するだけでなく、それらに代わるべき新しい価値の石板を示します。彼は批判し、否定するだけでなく、プラトニズム、キリスト教、およびそれらに基づいているすべてのもの——例えば、社会主義、民主主義、フェミニズムなど——を克服し、それらの代わりに未来の新しい哲学の基礎を築こうとしました。“永遠の回帰”という、彼の中心思想も、人生をあるがままに全面的に肯定しようという、ニーチェ自身の生命肯定の現われと解釈されるべきです。もちろん、キリスト教もプラトニズムも克服されねばなりません。ルター派の家に生まれ、プロテスタントの伝統の中で生長したニーチェにとって、キリスト教を克服することが彼自身のアモール・ファティ [amor fati] であつたのです。ニーチェ／ツァラトゥストラを、わたくしは生命を肯定する思想家、苦しみを通して人間として生長することを望む人間として理解したいと思えます。ニーチェによって描かれる未来の人間像——それを、生き生きと読者に伝えることが、わたくしの『未来における新しい人間像』の一つの重要なテーマなのです。

『ツァラトゥストラ』のプロローグにおいてニーチェは神の死について語っています。しかし、神のいない世界に生きることは人間にとって祝福なのです。人間がいさえすればいいのです。しかし、この人間は、新しい人間でなければなりません。そこで、ニーチェ／ツァラトゥストラは“超人”の到来を宣言します。神に対する信仰が失われること、人生の目的が喪失すること自体は、少しも悪いことではありません。もしも、信仰が失われるとすれ

ば、彼らの人生に意味を与えるのは人間自身の責任なのです。どのようにして人間は自己の責任を果たすのでしょうか？ あまりにも人間的な弱さを超えて、人間は自己自身を向上させねばならないのではないのでしょうか？ 自己自身を克服することによって、人間は自己自身を向上させるのです。自己自身を克服するための新しい教え——それが「ツァラトゥストラのメッセージ」なのです。しかし、あまりにも人間的な人間あるいは凡庸な群畜を超えて自己自身を向上させる人間は少数です。そういう人間は現在には存在しませんが、未来において出現するかも知れません。そういう人間が「超人」なのです。ニーチェは未来の新しい人間像を求め、「ツァラトゥストラ」第一部——第四部において、詩的な創作という形で、洗煉された詩人として、あるいはツァラトゥストラという名の預言者として、自己の哲学について語っています。わたくしは、ニーチェの「ツァラトゥストラ」を、このように理解し、そして、この文学作品について書いてみたいと思うのです。問題は、「ツァラトゥストラ」について書く機会を、わたくしが与えられるかどうかですね・・・

#### (4) 『ツァラトゥストラ』を読むための資料

『ツァラトゥストラ』を読むためには、われわれは信頼に値するテキストを選ばねばなりません。わたくしが選んだのは *Also sprach Zarathustra* Bd. 4. in: *Friedrich Nietzsche Sämtliche Werke Kritische Studienausgabe* in 15 Bänden, Hrsg. von Giorgio Colli und Mazino Montinari, Deutscher Taschenbuch Verlag de Gruyter 1967-78です。『ツァラトゥストラ』の翻訳書としてわたくしが絶えず参照したのは、Walter Kaufmann, *The*

*Portable Nietzsche*, New York: Viking, 1954)です。カウフマン以外に、R. J. Hollingdaleの英訳『*Thus Spoke Zarathustra*, Harmondsworth: Penguin Books, 1961)も参照しました。ホリングゲデルの英訳は、基本的にカウフマンの英訳を踏襲しています。フランス語とドイツ語を対比させた『ツァラトゥストラ』の翻訳〔*Ainsi parlait Zarathustra* Also sprach Zarathustra, Traduction et préface de Geneviève Bianquis, Aubier, 1969)も、非常に有益です。日本語の翻訳は、実に多数ありますが、わたくしの手元にあるのは、永上英廣訳『ツァラトゥストラはこう言った』(上)(下)〔岩波文庫、一九六七／七〇〕、手塚富雄訳『ツァラトゥストラ』〔中公文庫、一九七三年〕、藺田宗人訳『ツァラトゥストラはこう語った』〔ニーチェ全集 第一巻(第Ⅱ期) 白水社、一九八二年〕です。これらの日本語訳を、わたくしは参照しました。これらの諸訳〔英訳、仏訳、および邦訳〕の中で特にわたくしが負うところ多大なのは、プリンストン大学の哲学教授であったウォルター・カウフマンの英訳です。カウフマンの英訳について、わたくしは、いつも excellent!と感じております。

『ツァラトゥストラ』を読むのに不可欠なのは、この作品に対する注釈でしょうね。『ツァラトゥストラ』に対する標準的な注釈書として珍重されているのは、グスタフ・ナウマン〔Gustav Naumann〕の *Zarathustra=Commentar* (一八九九—一九〇一年。四巻)です。ナウマンと同様にセクション毎に『ツァラトゥストラ』を解説しているのは、アウグスト・メッサー〔August Messer〕の *Erläuterungen zu Nietzsches Zarathustra* (一九二二年)です。決定的な点において、メッサーはナウマンに頼っています。二人の考えが異なる時には、多くの場合、ナウマンの考えが優れていると言えるでしょう。メッサーの注釈書の扉には、ニーチェの妹〔Frau Elisabeth Förster=Nietzsche〕に本書が捧げられるという著者の言葉が見い出されます。一九二二年に出版されたハンス・

ヴァイヒェルト (Hans Weichert) の注釈書 *Zarathustra=Kommentar* は、ニーチェの研究者が利用するには余りにも短く、それほど役に立たないでしょう。 *Kritische Studien-Ausgabe*, Bd. 14 は、このシリーズ (全15巻) の1-13巻に対するコメントリが収められています。『ツァラトゥストラ』に対する注釈は第14巻、279-344頁に見出されます。この注釈は有益であると思います。『ツァラトゥストラ』に対する部分的、あるいは完全な計画については、 *Kritische Studienausgabe*, Bd. 10 の次の諸頁を参照するとよいでしょう——186、377、444、470以下、481、482、588以下、591、592、593、598、619、639以下、634。なお、オットー・グラムゾフ (Otto Gramzow) の *Kurzer Kommentar zum "Zarathustra"* (ベルリン、一九〇七年) を、わたくしは入手することが出来ませんでした。大変、残念です。

『ツァラトゥストラ』をテーマにした単行本は多数存在します。ここでは、わたくしの書齋にある、ツァラトゥストラをテーマとした書物の題目および出版年次だけを列举して置きましょう。一般の家庭の家計と同じように、わたくしのように裕富でない研究者は、乏しい資料をやりくりして、研究しなければなりません。わたくしの書齋にある、ツァラトゥストラを主題にした書物——全部ではなく、大部分——は次の通りです (それは、書物のコピーを含みます) ——

Bennholdt-Thomsen, Anke: *Friedrich Nietzsches Also sprach Zarathustra als literarisches Phänomen*,  
Eine Revision, 1974

Braun, Rüdiger: *Quellmund der Geschichte Nietzsches poetische Rede in Also sprach Zarathustra*, 1998

- Cauchi, Francesca: *Zarathustra Contra Zarathustra*: 1998
- Goicoechea, David, ed.: *The Great Year of Zarathustra* (1881-1891), 1983
- Happ, Winfried: *Nietzsches „Zarathustra“ als moderne Tragödie*, 1984
- Higgins, Kathleen Marie: *Nietzsche's Zarathustra*, 1981
- Köhler, Joachim: *Zarathustras Geheimnis*, 1989
- Lambert, Laurence: *Nietzsche's Teaching: An Interpretation of 'Thus Spoke Zarathustra'*, 1987
- Rosenhöfft, Wilhelm: *Nietzsches Zarathustra-Wahn. Deutung und Dokumentation zur Apokalypse des Übermenschen*, 1972
- Rosen, Stanley: *The Mask of Enlightenment Nietzsche's Zarathustra*, 1994
- Whitlock, Greg: *Returning to Sils Maria A Commentary to Nietzsche's Also sprach Zarathustra*, 1990

ツァラトゥストラについての専門論文は多過ぎて、ここに、それらの論文名を一々列挙することは出来ません。しかし、一九九八年にダニエル・W・コンウェイ [Daniel W. Conway] がピーター・S・グロフ [Peter S. Gnof] と共に編集した『ニーチェ 批判的な評価』 (*Nietzsche Critical Assessments*) は、注目に値する論文集です。この論文集は全部で四つの部分から構成されています。その第一部には、ツァラトゥストラに関する論文が比較的多く収められています。まだ書かれていない、わたくしの『未来における新しい人間像』において、『ニーチェ 批判的な評価』の第一部は、かなり参照されるはずです。ベルンフリート・シュレラート [Bernfried

Schlerath) によって刊行された『ツァラトゥストラ』(Zarathustra, Wege der Forschung, Bd. CLXIX, 1970) には、ツァラトゥストラに関する専門学者の論文が多数収められています。シュレラーの『ツァラトゥストラ』はニーチェのツァラトゥストラではなく、アヴェスタにおける預言者ザラスシュトラを指し示しています。しかし、ニーチェのツァラトゥストラをアヴェスタ語のザラスシュトラとの関連において扱うことも必要かも知れません。ニーチェの『ツァラトゥストラ』のテキストと翻訳、それに対する注釈、『ツァラトゥストラ』を主題とする書物、そして『ツァラトゥストラ』について書かれた多くの専門論文を絶えず参照しながら、わたくしは『ツァラトゥストラ』をテーマにした一冊の書物を出版したいと望んでいます。単なる研究は非生産的であり、不毛です。研究は単行本という形を取って出版されることによって初めて、世の中の人々の役に立つようになる、と、このように、わたくしは確信しています。歌わない歌手が歌手でないように、作曲しない作曲家が作曲家でないように、書物を書かない作者は作者ではありません。

## 終わりに

わたくしは平易な日本語を用いて、鋭く、しかも、軽快なタッチの散文を書きたいのです。抽象的な論理を武器として哲学の問題を扱うことを、わたくしは欲しません。そうしようと思えば、そうすることは可能ですが・・・スコラ的な学者あるいはアカデミックな研究者であるよりも、わたくしは詩的に創作する一人の文学者になりたいのです。わたくしは、あまり売れない、うだつが上<sup>あ</sup>がらない作者の端くれではありますが、学術的な論文を書きたく

ありません。わたくしはエッセイを書きたいのです。しかし、わたくしのエッセイは決して随筆ではありません・・・

『未来における新しい人間像』において、わたくしはツァラトゥストラのメッセージを解読しなければなりません。そのためには、『ツァラトゥストラ』のドイツ語のテキストを読まねばなりません。ドイツ語で書かれたナウマンなどの注釈書も参照しなければなりません。そして、ドイツ語あるいは英語で書かれた専門論文とも格闘しなければなりません。場合によっては、わたくしはフランス語の論文も読まねばならないかも知れません。しかし、わたくしは「文献学の奴隷」になることを拒絶します。わたくしは、博識の学者になりたいとは思いません。わたくしは血の通った一個の人間として「人間とは何か？」という問いを探求したいだけなのです。博識を誇り、世間の人々から賞讃されることが、わたくしの望みではありません。自己自身について反省し、そうすることによって、わたくしは人間精神を深い次元において洞察したいのです。そのために、わたくしは何をなすべきでしょうか？

わたくしは自由な精神として、孤独に耐え、勇気を以て、自己自身を向上させねばなりません。『ツァラトゥストラ』について語ることを通じて、わたくしは現代思想を批判し、二一世紀の新しい人間像を模索したいのです。わたくしの『ツァラトゥストラ』の解釈は、ひょっとしたら、全部間違っているかもしれない。しかし、それはそれでいいのです。努力することが、わたくしにとって、生きることなのですから。『ファウスト』の中で、あの偉大なゲーテも、こう言っているではありませんか？

*Er irrt der Mensch, so lang' er strebt.*

〔人間は努力する限り誤りを犯すものだ。〕